
アルティメットインビンシブル暴力女

和呼之巳夜己

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルティメットインビンシブル暴力女

【Nコード】

N2490E

【作者名】

和呼之巳夜己

【あらすじ】

こんにちわ。切り裂きジャックは殺しません！で竜太と一緒にいる理緒です。これは私の怪力はちゃめちゃ天真爛漫豪快活劇ひっちゃめっちゃかストーリーで！私が切り裂きジャックに入るまでのスパイ活動報告記録です。私が怪力スパイじゃなくて誰がやる？切り裂きジャックは殺しません！発のスピノフ作品、アルティメットインビンシブル暴力女、どうぞご覧ください。ちなみに三度連続読みすると、いいことがあるかもなのです。何かって？話が頭に良く入る。

身近な学校編巻 呪われた秘密（前書き）

私、黒崎理緒は、かくしてたけど・・・スパイだったんです・・・。

身近な学校編 呪われた秘密

身近な学校編

ミッシヨン壺 呪われた秘密

私は今、自分の小学校、大神戸小学校に来た。一般的に、こうべではなく、マニアックにかんべでもない。だいじんと読むのだ。でも最近、その大神戸小学校に悪い噂が立ってる。誰かが、毎晩小学校に来て、部屋のどこかに必ず一体ずつ謎の人形ギリゾーを置いて、去っていく。その人形が残された部屋で、一人は怪我をする。生徒教師関係なく。それを止めるのが、スパイとしての私の今日のミッシヨン。

ICALLー

「おい。理緒。学校に着いたか。じゃあ、今日の反応を教える。」
多目的通信型時計に通信が、私のスパイ活動本部の長官から届いた。
「図書室から反応。理科室で二つの反応。職員室から多数の反応。資料室兼パソコン室より、発信されている模様。一つ一つ、確実に反応を消していくように。また新しい情報が入り次第、連絡する。」
そう言って通信は切れた。私は早速図書室に足向け、小走りで向かった。

図書室の前に来ると、ただならぬ悪寒が背中を走った。これからこんなこともやっていかなければスパイはつとまらないのか。心を決めて、図書室に入るべく、ドアを開けようとして取っ手をつかんだ。取っ手が氷の何十倍も冷たい。これがギリゾーの能力なのかもしれない。

図書室にはいると黒板に目を奪われた。ギリゾーが、ぬいぐるみの大きさを越えて、人のサイズになっていた。私は大パックから、手袋を出した。長官が作ってくれた私専用の怪力パワーガンレット

だ。それを素早く装着すると、ギリゾーを捕まえに前に出た。まだギリゾーは気が付いていないようなので、簡単に、捕まえられた。デイパックのスパイポケットに入れて、図書室を後にした。

「ギリゾー様、あなた様の分身の反応が、一つ消えました。いったい何者なのですか。お教え下さい。」

こっくりさんの用に、ひらがなが書かれたか身の上を、ギリゾーは動いて、一つ一つ文字を示していった。

「す．．．ぱ．．．い．．．。スパイが来ているのですね。」
まだギリゾーは動いていた。

「きょう．．．で．．．お．．．わ．．．り．．．。何のことですか．．．。」

職員室

「きゃ．．．ちょっと。おとなしくしなさいよ。いや。」

理科室では簡単だったのに、複数となると管理が行き届いていて、一気に見つかってしまった。怒った私は机にあった物を的確に投げつけた。三十匹、やっと確保。

資料室兼パソコン室に向かう私の足取りは重かった。本体はどんな物なのだろうと思うと、足はなかなか進まなかった。

ICALLー

「理緒。ギリぞーk d j f h g r h k s m j d c s k j d z m k h d f w q s m l p y t」

途中からノイズが入り、変な言葉だけが聞こえていた。虚ろになっていた私はいつの間にか問題の部屋に来てしまった。

突然、部屋のドアが開いた。

「スパイめっ。観念しろ。」

そう言って首から下げていたありがたいギリゾー様の人形を空中に投げて、利き手でキャッチした。

「ギリゾーエンブレム!!!!」

そう言ってキャッチしたギリゾーは、剣になっていた。それをいきなり振りかざしたから、顔面すれすれで真剣白羽取りをするしかなかった。

「ぎゃーーーーー」

そう言いつつも、剣を止められていて、少し、ほっとした。

「今度は私の番よねえ。」

思いつきり作り笑いして、思いつきり拳を付くって思いつきり、パンチした。

そのとたん、ギリゾーが手から放れて、私の方によってきた。

「ワタシノシハイハオワリハシナイ。」

そう言って、空中に解けていった。

FILE1..ギリゾー 子供を支配して、学校を壊そうとした。学校を首になった教師の怨念で出来たらしい。

—CALL—

「ミッションクリア。次は爆弾魔を捕まえるぞ・・・。」

次回予告 ミッション式 学園祭と爆弾魔と私

学園祭の準備をする私とクラスメートの前に、謎の小学生が現れた？その少年は、爆弾使いで・・・ 次第に明らかになってゆく、頭脳集団プランナの影。学校を、巨大な爆弾から守ることは出来るのか・・・。

身近な学校編巻 呪われた秘密（後書き）

次回、爆弾魔に敗北・・・？

身近な学校編式 学園祭く爆弾魔の過激な爆発く（前書き）

今回で身近な学校編1は終わります。2をお楽しみに。そして次回は、殺し屋のお話です。三日坊主の殺し屋と、あるイン防音の戦いの行方は・・・・的な話にしたいんですが・・。

身近な学校編式 学園祭く爆弾魔の過激な爆発く

ミッション式 学園祭く爆弾魔の過激な爆発く

大神戸小学校第十七回学園祭 私は、学校の出し物を一つ作るんだけど、期限までに間に逢わなくて……。友達と同じ物を作るのに、変なところだけこって作ってしまった私は友達に今、助けてもらっている。

どこの学校でも同じ様な音が鳴ると思う。だって、変える意味もないし、変えてところで意味もないし。聞くたびにそう思う音が、なつて、私の額には冷や汗が流れている。明日は学園祭があるからか、校長の放送も流れた。

「学園祭の準備をしている諸君。今日はもう帰りなさい。明日もついでに休みなさい。間に合わなかったんだから。」

校長はみんなから嫌われている。今の放送を聞けば理由は言わずに分かるはずだ。それでも帰らない私たちの所に嫌みったらしの校長が来た。

「君たち、さっきの放送が聞こえなかったのか。帰れと言ったら帰りなさい。」

仕方なく片づけをしていると、メンバーの一人、渡辺朋彦が、みんなの所へ一人ずつ回っていった、声をかけている。

「今夜、九時。校門前集合。」

私の元にも、それは届けられた。

一夜ー

呼びかけた当の本人、渡辺朋彦がこないまま、私達は、クラスで作業をしていた。当然、学校にはもう、人はいない。私たちの他に。なのに廊下では音がする。

カツ・・・カツ・・・カツ。

いう音が同時になった。前に、何かのテレビで聞いたことがある？・・・違う。私は脳裏を一所懸命に探って、音の正体を突き止めた。

爆弾

頭にひらめいたとき、私は駆けだしていた。昨日、あいつを見失った場所、屋上に。そこで私は段ボールの配置が昨日とがらんと変わっているのに気が付いた。昨日、ここに隠れていた。私はやつとそのことに気が付いて、頭を抱え込んだ。

でもそんな事してる場合じゃないときが付いて、屋上に上った。

昨日の影は爆弾魔だったのか・・・くそ！

バン！と大きな音を立てておく上に付くと、そこには私と同じ身長をしている男の子がいた。

その子は、私の方に振り向くとニカッと笑い、話し始めた。

「僕は、頭脳集団、プランナの一人、渡辺朋彦。君の想像通り、爆弾魔だ。昨日、僕は手がかりを残して隠れたのに、君は全く気が付かなかった。まあ、良い。後五分で爆発することになっているんだから。それまでにあれ、壊せる？いや、壊したら爆発しちゃうよねじゃあ、どうすればいいのかな・・・。教えてあげる。僕の懷から、鍵をとれば良いんだよ。残りは後三分。じゃあ、遊ぼうか。」
そう言うのとベルトについていた爆弾に火をつけて投げてきた。むろん、避けて吐いたけれど、これ者、校舎が壊れて、校長に嫌み言われちゃう・・・。そう思っで一氣に真下に入って、鍵をとって、朋彦をのした。

急いでいったけれど、間に合わなかった。爆弾からは、煙がでて、空に向かって飛んでいった。その煙は、それで爆発してしまった。そう。花火のようだった。花火の。

私は大股で、朋彦の所に近寄ると、記憶が飛ぶくらい、思いっきり殴りまくった。

花火はそれで輝いていた。

理緒が入ってきたドアの上にいた機械仕掛けの鳥が飛び去った。

その鳥は、頭脳集団、プランナの元へ行くと、その映像を見せた。

「ふーん。あの下っ端とはいえ、頭脳集団の一人をやっつけちゃった。面白いアマだなあ。」

同時刻同町近所公園内にて。

「がふっ・・・が・・・ああ・・・」

「殺し屋は、依頼主、つまりクライアントから受けた仕事は必ずこなす。そうしないと、こっちが殺されてしまう。貴方は、何か恨まれることをしませんでしたか？でももう遅い。貴方の罪は、今ここで清算されたと思ってても良いのですから。安心して下さい。」

次の日、新聞の記事は、謎の犯罪で一面が埋まっていた。

ファイル二 頭脳集団プランナ下っ端爆弾魔 渡辺朋彦

続く

身近な学校編式 学園祭く爆弾魔の過激な爆発く（後書き）

次回、頭脳集団、始動！の予定。

目的は殺し屋編 殺し屋は三日坊主（前書き）

第三話は、仕事で殺し屋の人の説得を試みマース。

目的は殺し屋編 殺し屋は三日坊主

目的は殺し屋編 殺し屋は三日坊主

ここ最近、連続殺人が起きて、新聞も、ニュースもこればかりである。警察は、犯人像を切り裂きジャックとして捜査をしている。新聞を本部で見た私は、新聞を天井めがけて投げつけた。パソコンをかちかちいじっていた長官は、大声で私に与える次のミッションを決めた。

「お前の次のミッションは、その切り裂きジャックを捕まえろ。いや。犯人を暴け。」

そして、私は公園にいる。次の被害者が分かったからだ。東堂箕郷とうどうみさと。古い師をしている人だ。私はその人の後をこっそりと付けている。これぞスパイって言う感じだ。私は手に持っているホットドックを口いっぱいほおばった。

「あ。これ、ほんとにおいしい。さすが、噂の影の人気店、暖犬。」
ほっとドックに目を奪われている間に、箕郷は殺された。

「ング・・・アガハ・・・ヌブ・・・」

次の瞬間、目を上げると、箕郷は紅色、血に染まった人形のようになっていた。

公園を走っていく黒ずくめの男が走っていた。私は今日のニューアイテム隠し短刀、汀。それを手の袖に隠して走って追っていた。裏の路地には行ったところで男は振り向いた。

「その足下の私の片割れを・・・返してもらえるかな。」
そう言ったまま手に隠し持っていた凶器を振り上げて、襲いかかってきた。汀を振りかざすと、その凶器は、おれた。

「頼む・・・。その俺の片割れを返してくれ。」

そう言うとポケットに手を入れて、チャカを取り出した。

「……………」

素直に箱を渡した。死にたくなかったから。生きたかったから。チャカを向けられたまま私は犯人に聞いた。

「その箱は何なの。」

「俺の片割れ。すぐに記憶をなくしてしまう俺は、殺し屋という仕事は都合がいいんだ。お前のことも書いといてやろう。」

説得を続けた。一時間という長時間に及ぶ説得で、殺し屋を説得できた。

「俺は・・・今日、殺し屋を辞めて見るよ。今日、お前と会えてよかった。」

これで終わりだ。と思い、本部に帰った。

「あの。今日で辞めたいんですが。」

「そうか。じゃ、これは餞別だ。持っていけ。」

「はい。」

公園で、餞別を開けた殺し屋、小島高志は、その公園のベンチで爆死した。餞別は、爆弾だった。渡辺が作った物だった。彼もまた、頭脳集団【プランナ】の一員だった。小島に、爆弾を与えた頭脳集団の一人だった。

次の日の新聞にはこの公園で起こった爆弾の事件が三面も飾っていた。

彼が、この世界に入ってしまったのは、なぜだったのだろうか。

目的は殺し屋編 殺し屋は三日坊主（後書き）

続きます。次回は、歴史に関するお話です。一般人よりも有名な人が登場します。

時空を越えろ編 怪力女を助ける男（前書き）

アルイン 時空を越えてしまう理緒です。今回は三話ぐらいで完結できることと思いますので、お待ち下さい。

長官 さっさとミッシェンクリアーしろ！。

坂本 死ぬのもまた、運命ぜよ。

時空を越えろ編 怪力女を助ける男

時空を越えろ編 怪力女を助ける男

「長官。私、時空って越えてみたいんですけど。いつになったら出来るんでしょうね。タイムマシン。」

時空間移動と言う本を読んでいる私は長官に聞いた。さっきから、何かを作っている長官は、連日、同じ様な行動をとっている。何かを作る事だけに没頭しているのだ。

「・・・・。出来てるぞ。」

思わず本を落としてしまい、読んでいるページがわからなくなった。でも、そんなことを気にもせず、長官の方に歩み寄った。

「ほれ。」

のぞき込んでいる私に向かって長官は苦笑いをして、背中を押した。でっかい段ボールのような箱に入れられた私を見て、長官はふたを閉めて、こう告げた。

「坂本龍馬にあって来るんだぞー。」

目覚めると、そこは、有名な占い師だった。でも、初めてみるし、教科書とは全く違うので築かなかったが。

「何者じゃ。」

—CALL—

「ごめん。卑弥呼だった。」

長官は、いつもの声色で、反省の色もなしに、言った。それに対して私は、怒った顔で、反乱した。

「しゅっぱー。」

心の準備もないのにまた私はスター・ツアーズを体験させられた。木枯らしが吹き荒れた。音も、ヒューでは無く、ころころ・・・だった。背後に迫る草陰からは、ごそごそと音がしている。それと、

下劣な笑い声も一緒に。

「ぷ・・・プランナ！」

「クハハ・・・見つかった。抹殺指令がでていますよ。お嬢さん。」

下劣な笑い声とともに、私の樹上には、その時代にあつた恰好をした頭脳集団がかまえたその時代の剣が迫っていた。それも、何本も。それが思いつき、振りかざされたとき・・・。反対方向の草陰から、男がでてきて、その何本もの剣を一本の剣で支えた。

「女一人に大の大人がよってたかって何のようぜよ。ワシが相手をしちやるけん、かかてくるぜよ。」

その男に、私はもって行かれた。大事なハートを。そしてそのハートを持っていった本人はそんなことに鎌ってはおられずに、何本もの剣を、振り払って、私にこういった。

「この先の店に行くぜよ。」

私は走り、その店、付いた。その先には、もう一つ店があるけれど、まずはこちらからだ。

「あの・・・。坂本さんに言われてきたんですけど・・・。」

「ああ。いらっしゃい。そして、さようなら。私たちの宿敵のスパイさん。」

意識が途絶える前に見た、その店員は、まるで私の生き写しだった。

—CALL—CALL—CALL—

薄れていた意識は、いつの間にか戻ってきていて、私は、目覚ましの変わりとも言えるような通信で目覚めた。

「アフィン・・・ニュグ・・・」

「起きろ。アルイン暴女。坂本龍馬が危ない。」

そのキーワードは、あたしを目覚めさせるには十分だった。

坂本龍馬は、帰宅途中、新撰組に、命をねらわれている最中だった。
私は運良くその場に間に合った。
「やめなっさいっ。」

時空を越えろ編 怪力女を助ける男（後書き）

サカモトリヨウマ、リオ、シス。ウンメイハ、キュウソクニオチテ
イク。コノコウカヲトメラレルモノハ、モウ、イナイ・・・

時代を超えろ編二 時代の流れを変えろ（前書き）

これは、私の中で初めての思い。歴史上、逢うこともできなかった私は、会ってしまった彼に思った。

時代を超えろ編二 時代の流れを変えろ

時空を越えろ編二 時代の流れをぶっ飛ばせ。

「私は負けたりしないのよ。新撰組、本日壊滅させてやる。」
体が軽くなった。

守りたいと思ったからこそでてきた力だった。

「私は彼が好きなのよ！その彼を、あんたら外道に消させやしない！」

理緒は、アルティメットインビンシブル暴力女としてではなく、一人の女として。

「全世界を束ねる神スピノよ。我に愛するものを守る力をつ無力剣！」

それは与える前に、消えた。理緒が止めたからだ。それは背後で鈍い音とうめき声がしたから。もしかしてと・・・思ったから。案の定、それは当たってしまった。

背中に突き立てられた剣を、私はみてしまったから。

「おお・・・・・・ぐくう・・・・・・だぜよお」

彼は最後に何かを言った。でもそれは誰にも聞こえなかった。場面は、宿屋に・・・変わっていた。いつの間にか。

「許さない。」

「嬢ちゃん、許してもらわなくて結構だよ。ともに死ね。」

襲いかかってきた男はくぐもった声を上げて倒れた。

「おおおおおおおおおおおとおおおお・・・」

私の肩に手をおいて、倒れた。

自分の先祖かもしれない。私が消えるかもしれない。でも、そんなことより、この気持ちをどうにかしたかった。

斬と激と壊立っていたのは理緒一人だった。

「敗北者め。」

歴史なんてものは、大嫌い。

「歴史なんて大嫌いよおーーーーー」

—CAL—

「かえって・・・もごもご・・・こい。」

どこかでみていたであろう長官の声は、・・・・・・・・何か食べていたようにも思えた。こんなときに。

「バイバイ。ありがとう。龍馬さん。さようなら。」

私は、道ばたに咲いていた花を、拾ってきて、供えた。

下校中、理緒は大きな空を・・・・・・・・龍馬に似た大きな空をみて思う。

あと少しで、もう一度私たちは会う。

紙面上で、彼は私をみていくれるだろうか。

ありがとう。龍馬さん。

私が待つ時間、それはやっぱり、彼と会うとき・・・。

私が歴史上初めてあった人。

私が歴史上初めて愛した人。

私が人生上初めて愛した人。

私がー

ファイル五、坂本龍馬

時代を超えろ編二 時代の流れを変えろ（後書き）

次回は、謎のミッションを行うんだって・・・。

闇の使い手編（前書き）

長らくお待たせしました。

アルティメットインビンシブル暴力女、連載再会です。

期待の新章突入か？

アルティメットインビンシブル暴力女、第四部闇の使い手編、どうぞ。

闇の使い手編

闇の使い手編

本日早朝、私こと黒崎理緒は本部に呼ばれた。

私を呼びつけておいて、ぎりぎりまで寝ていた。総長の呼び出しは前日の夜に、予約していたものらしい。

人起こしといて自分寝るってどうユーことですか？

それはさておき、長官は、新聞を寝巻きで読みながら、私に一枚の紙と、分厚い書類を手渡した。「これ、何ですか？」

私は思いつき首をかしげた。

長官は、机から別の書類を取り出して、読み上げた。

「まことに勝手ながら私ちょーかんは、あなたを昇格試験に出します。」

ぼー読みです。

「これを書くのに睡眠時間を三時間削った。」

胸を張って言うな。胸を張って。

「明日から試験だからよろしくねー。」

「で、明日になりました。」

理緒は、本部の長官の机に手を載せ、机を叩きながら長官の持っている新聞に開いた二つの穴から出ている目を見た。

「で、何処にどう行けばいいんですか。」

長官は、口の部分を切りあげると答えた。

「書類読めよ。俺ぜんぜん読んでないんだから。お前のだし。」

お前が勝手に推薦しちゃったんじゃないですカー。ちょーカーん。

私の心の中では、その言葉が口から出ようとしていたため、必死に防いだ。

前日

暗闇の中に、光る球が四つあった。

「で、今回の参加者は？」

お下げの少女が書類に目を通しつつ質問した。

「お前の光だよ。」

質問に、男は答えた。

「光のわた……。」

そこまでいって自分で気が付いたのか、意味ありげに笑って、少女は書類をとじた。

「私か。対の私か。」

少女は男に書類を投げ飛ばし、男は受け取り、少女に告げた。

「お前が光に勝たねば、お前は消滅する。それを肝に銘じ、光を消去しろよ。」

ふんっ鼻を鳴らした少女は、闇炎《あんえん》を残し、その場から消えた。

そのに残るのは二つの光る球。その光は、一瞬消え、再び付いた。

「俺のために勝ち、あいつを消せ。黒崎理緒。お前の光を。そしてあいつがひきいる組織を完膚なきまでに叩き潰し、あいつをあるべきところへと送り届けてやれよ……俺の光を。長官……。さあ。明日から始まるのはあいつにとって地獄になるのかなあ……。」

そして男は、こげあとを残して消えた。

男がいた場所には、焦げ目と、紙の燃えかすが散らばっていた。

それは、男から見ると、忌々しい光の写真だった……。

「闇は始まったばかりだ。この先貴様らが生きていられる確率など、満一つも残してはおかないからな。お前らは消してやる。」

「で、私はどうしたらいいんですか？」

未だに理緒は会場にはたどりつけてはいなかった。

「ああ。もうすぐ行かないと不参加になるなー。」

「だからその行き方を教えろってんだよお……。」

理緒は魔法瓶を机に叩き込んだ。

「棚どかした魔方阵ですよー。」

長官は新聞から、目をそらさなかった。

理緒が行った後の本部で。

「理緒こエー。からかうのもいい加減にしなきゃなあー。」

新聞を置いた長官は、机から必死に魔法瓶を取り出しながら、つぶやいた。

ファイル六 黒崎理緒

闇の使い手編（後書き）

第一の課題は・・・い・・・いきなり、空想動物《ファンタジー
アニマル》？しかも有名な・・・、龍《ドラゴンさん》・・・
勝てるのかしら！。

闇の使い手編二（前書き）

第一試験の開始の幕は下りた。
巨大な龍相手に、アルティメットインビンシブル暴力女がとった行動とは・・・。

闇の使い手編二

闇の使い手編二

目の前に、創造道理の龍がいる。

大きな翼。大義の翼でもある。

金色に輝く鱗。

きらりと並ぶ私並みの犬歯。

そして巨大な、大きな、威厳のある、尻尾。血に飢えている目。そんな姿かたちをしている龍は、受験者の私に話しかけた。

「ほう。貴様が今回の受験者、理緒か……。我は、火炎の竜王、ドルメキス。貴殿を、昇級させぬため、死へ導く案内人なり。覚悟せよ。」

ドルメキスは火を噴いた。私の髪の毛が、ジュワァーと焦げる音がした。焦げる臭いは解からない。鼻詰まりがひどい。

「私は、昇級して、あの長官超えて……。ぶっ潰すのよ。」
手ぐしで髪をなおしながら、私はつぶやく。

怪力力拳保守《KPG》装備。

「私の名前は、黒崎理緒。この試験に勝って、長官をつぶすものなり。」

突っ込んでいった。速度では負けるはずがない。あんなでかいのからは。そう思ったかをくくっていた。

「ほう。早いな。しかし、私が、火炎で近寄れなくしたらどうするのだ。このように。豪火龍円陣！」

ドルメキスは自分の体を火炎で包んだ。

「これならば、貴様は、来れまい。」

ドルメキスは目を大きく開くと、私に叫んだ。

「貴様は退屈そうだ。わしは眠い。早々に散れ。私の鱗を、真紅の絵の具でぬらして。輝ける匂いを撒き散らして！冥王灼熱業火。」

立ち止まっていた私に、ドルメキスは、一本のように見える、細胞から焼き尽くす業火を放った。私の目の前には、光る火炎が見える。きれいな光。現実を忘れさせてくれる……。

「理緒、お前はそんなものじゃないはずだろう。」

本部で、コーヒーカップに口をつけていた長官が言った。コーヒーが入っていたから正確には、

「リギョ、オババヴァホグラゴギヤリヤイヴァギユギヤリョー。」

と聞こえた。

誰も何も言わない。

「光の私は、もう終わったのか。」

反対側で戦っていた少女が、男にタオルを投げて言う。

「いまだ、戦闘中。お前のほうが早いよ。」

男がタオルをよけていった。

「本当に私の光なのか？私の方が強いではないか。」

そういつてから少女は腕を組んで考えた。

「それとも私は、^{ブランチ}頭脳軍に作られた紛い物の生き物……ピクシ
ーなのか？」

少女はめったに見せない表情で問う。

「お前はピクシーなどではない。私の光の弟子だ。」

男がはにかんで言う。少女はそれに満足したのかしないのか、その場から姿を消した。

「私がピクシーかどうかは、私の光を消して、確かめる。手出しをするな。」

そう、言い残して。

誰もいなくなった場所で男は言った。

「自分の事に気が付き、自分で何者か知ろうとしてしまう。知能を与えすぎたかな。^{ブランチ}頭脳軍の研究成果も、たいしたことないな。」

男も消えた。男は消えたが、名表は残っていた。

頭脳軍特殊戦闘部隊特別戦闘員

名表にはそう書かれていた。

現実が忘れさせてくれる光がもたらした熱気ですべて思い出した。

「怪力手回し！」

手を前にぶんぶん振って炎を消し、通り道を作る。もちろん、凄
炎だから、瞬時で道は消える。ドルメキスは、気が付いていない。
炎で何も見えてはいないんだろう。

「怪力汀首切り包丁一刀両断！」

ドルメキスの首が、私の真後ろに落ちる音がした。

ファンファールが鳴り響く。

「第一試験、黒崎理緒、合格。」

機械音で知らされた。

「続いて、第二試験、不死鳥を殺せ。殺せ・・・殺せ！」

第二試験は、過酷なものになりそうだ。

続く

ファイル七 長官

闇の使い手編二（後書き）

第二試験、アルティメットインビンシブル暴力女に勝ち目はあるのか。

不死鳥を殺し、第三試験を受ける事が出来るのか。

闇の使い手編三（前書き）

私の第二試験は、途中で中止された。

闇の使い手編三

闇の使い手編三

闇の中。

「いいか。お前は、不死鳥が出てきたらお前が、やつの代わりに殺すのだ。これでお前は、幹部入りを果たす事ができるんだぞ。」

組織の中で、そんな会話があった。
男はまだ小さい少年に・・・服を着ていない全裸の少年に優しく語りかけた。

「お前がうまく行動したらそれ相当の格好と、ほしいものを渡そう。」

少年はぽああああと微笑んで何度もうなずいた。

「ならば行け。鞭に打たれたくはないのだろう。」

少年はさっと走り去っていった。

「グワエエエエエ！」

不死鳥が、私の前の木に止まり、目を細くしてにらむ。

「少女よ。私に何を望む？」

不死鳥が語りかける。

私は、汀を落としてしまった。

「不死鳥はしゃべるの？」

「そうだ。私はしゃべり、不死であるためお前には殺せない。そして、私は殺せる。」

「・・・・・・。そんな・・・・・・。」

私は、地面に座り込む。不死鳥は、翼を大きくはためかせ木から飛び立ち、羽を落とす。

「私は、龍ドラゴンなどのように甘くはないぞ。瞬殺だ。死ぬ。」

嘴を風で尖らせ、大きく下降して、私の頭上に落下してくる。

「待て。僕が倒して、第三試験は僕が受ける。」

つるとかめみちた
鶴斗亀途太が、試験場に・・・不死鳥の真上に降り立った。

ブロンズソード
途太は伝説の大剣、黄金像剣を両手でもち、不死鳥の首に剣をかけた。

「お前は、これで死ぬ。不死八倒暫。」

「ギュゴエ・・・。」

目をクワツと見開き、不死鳥の首は、カクンと下がった。

不死鳥は死んだ。

死なないはずの不死鳥は。

「次に、僕は第三試験の邪魔になる人間を完全排除する。頭脳軍の命令により。黒崎理緒。貴様をこの剣により、黄金像へと換える。」
そして剣を不死鳥の首から私に換えた。

「僕の次の目的は貴様の死により果たされる。両親は解放されるんだ。心安らかに逝け。」

不死鳥の次は、これだ。

続く

ファイル七 鶴斗亀途太

闇の使い手編三（後書き）

私は、彼をどこかで見たとような気がする。

闇の使い手編四（前書き）

いよいよ、アルティメットインビンシブル暴力女、クライマックス突入か？

闇の使い手編四

闇の使い手編

「理緒、頭脳軍の意志に逆らうものよ、ここで死ね！」

途太は、剣を大きく振り下ろしてくる。アルインは大きく無駄なく動き、よけ、

「腹部痛痛痛痛痛痛痛痛痛痛！」
ふくぶくいたたたたたたた

途太はその全てを体で受けた。

「ハイヤー！」

サービスでもうワンセット追加だ。

「腹部抑える打叩き！」

途太はすでに散歩左によけた。

「両親を解放するんだ。」

途太は柄で理緒の頭を叩いた。

「僕は、守りたい人を守るんだ！」

理緒の手は止まった。

「両親……親……。」

理緒は、親を思い出していた。そしてそこに、途太は付け込んだ。

「一刀両断柳極限奥義伝説抜刀！」

理緒の、左肩から、赤い飛沫があがった。

「あうう……。」

理緒は途太を見た。

「貴方は間違っている！怪力汀峰散切り。」

左手で方を力いっぱい抑え、右手で汀を構えて叩き込んだ。痛恨之
クリティカルヒット
一撃。

途太は、倒れていた。そしてそこに、黒い竜巻が現れた。

竜巻は理緒の前で止まった。

黒服の男がやってきた。

「黒崎、理緒君。我々頭脳軍^{ブランナ}の邪魔をするのであれば、この少年のような捨て駒ではない、幹部がじきじきにお邪魔する事になるぞ？
良いな、このことから手はひくんだ。」

途太の右腕を引っ張る形で宙に上げ、理緒に忠告した。

理緒は荒い息で答えを求めるべく、質問した。

「その子の親はどうしたの？」

黒フードをはずしたの黒服の男は答えた。

「もうすでに、我らの実験台となって死んだ。」

顔が傷だらけの男は再びフードを被り、理緒の前から消えた。

「我ら頭脳軍^{ブランナ}は誇り高く空を舞う、一つの鷹である。」

竜巻は、消えた。

—CALL—

「理緒。」

長官だった。

「長官。」

「何だ？」

「頭脳軍^{ブランナ}って……。」

「そのこと言いたい事がある。至急、本部まで来てくれ。」

結局邪魔されたわけで、昇格試験は来年に延期にされた。けれどが
んばったといわれ、来年の試験は、この続きから始まる。

「長官。」

理緒は本部の司令室に来ていた。

長官の部屋だ。

「理緒。頭脳軍の本拠地がわかった。」

「本当ですか？ 私、あのこのような子供を救いたいんです。だから、ぶつつぶします、奴らを。」

長官が立ち上がって本棚をどかした。

「魔法陣……。」

「ここから、本部に直行できる。」

長官は私のほうを向いていった。

「行くか？」

行ってくれでもなく、行くのか、嫌なら止めても良いではなくて、行くのかといった。

「一緒に来てくれるんですか？」

「今回は本部……奴らの城だ。俺が行かないと、ダメだろう。それに、あいつも、俺との最終決戦を望んでるに違いないしな。」

長官は、そういうと、中に入った。

「これで、最後なんですね。」

一人つぶやいた理緒は、魔法人の中にドロップキックで入っていた。

ク

クラ

クライ

クライマ

クライマッ

クライマックス
クライマックス
クライマックス
クライマックスも
クライマックス
クライマックス目
クライマックス目ぜ
クライマックス目前

闇の使い手編四（後書き）

次回予告

とうとう、^{ブラーナ}頭脳軍の本拠地がわかった理緒、長官。

二人は意を決して奴らの城へと潜入する。

そして、黒服集団を倒して、^{ブラーナ}頭脳軍を壊滅させる事が出来るのかびっくり

切り裂きジャックは殺しません！初のスピノフ作品

アルティメットインビンシブル暴力女、とうとう、完結への扉が開く！

長官が言うアイツとは誰なのかその真実は……。

最後の砦 一（前書き）

アルティメットインビンシブル暴力女最終章！
フランナ
頭脳軍壊滅を実現せんとす！
そして理緒が切り裂きジャックに入った理由とは？

最後の砦 一

最後の砦 一

私は、^{フランナ}頭脳軍の本拠地を始めてみた。

大きく、黒い色のそれは、悪を思わせる。

「行くぞ、理緒。」

長官が、どんどん上へと登っていく、私もいく。

1836段目の階段で、私はギブアップした。

「ちょ・・・長官。休みましょ・・・」

私は、階段に座り込んだ。

「休めるわけないだろう。せっかく何も言わないで進んできたのに、お前が言うから気づかれた。」

そういうと長官は何処からか、両手剣を取り出した。

「クライシス」

長官は、両手剣をなで、構えた。

「風の刃!」

巨大な機械の残骸で出来たそれをクライシスの一振りで、塵に換えた。

「とっとと行け。お前も切るぞ!風の龍!」

クライシスから出たその龍は、すべての機械残骸兵を粒子レベルで粉碎していった。

「風の刃!」

私は上へと上った。

「あら、遅かったわね。でも、きちんと私達の邪魔するなーって言ったはずよ?そういうお譲ちゃんはおいたしなくっちゃ。私の名前、^{ラヴ・ウィップドドレイン・デス}教えてあげる。私は、サザンクロス。そして愛鞭の赤雨刻私がお仕置きしてあげるわ。」

サザンクロスは一人で長々とべらべらと話して襲い掛かってきた。

その鞭は、十字にクロスされていた。

「へえー。その顔からして、この鞭の由来、解っちゃった？じゃあ、ご褒美に、死なせてあげる。」

サザンクロスは高速移動で私の前まで移動してきた。

「お譲ちゃんに、ご褒美。毒の息。」

やっぱり毒なのね・・・紫色の霧が、私の目を奪った。

「サザンクロス！何処にいるのよ！」

といっても笑い声だけ。

最終手段に出させてもらいます。

思いっきり息を吸いこんでえ・・・・・・・・。。。

「この、ババあああああああああああああああ。」

ババアアアアアアアアアア

ババアアアアアアアア

ババアアア

木霊だ。

「ば・・・婆ですってえ？」

ふむ、やっぱりこの手の若作り奥様にはこの手が良く効くわねえ。

結局は婆じゃない。

「許さない！この私を婆呼ばわりした罪を、償いなさい、サザンクロスフェスティバル！」

十字の鞭が何度も何度も体に当たる。

！

「きゃあ！な・・・なにすんのよ、このお譲ちゃんは？」

サザンクロスの鞭を手に巻き、引っ張ってやった。

「こんな、将来性のある美しい私を怪我させたことを、おばさんに

最後の砦 一（後書き）

次回、二階から五階ぐらいまで、入るかな？

最後の砦 二（前書き）

アルイン、クライマックスストーリー！

最後の砦 二

最後の砦 二

「サザンクロスはな、俺の級友だった。明美だったんだよ。アイツは。」

長官は、階段を上りながら、しみじみといった。

「明美……。もしかして、長官のこれですか？」

私は、小指を長官の前に突き出した。

「馬鹿。斬るぞ。」

そういつて、長官は両手剣クライシスを鞘のままで叩いた。

「痛い！そんなにこれのことを言っただけで欲しくないわけ？」

再び小指を……。

「風のなぶり殺し！」

本当になぶりごろされるところだった。

「ねえ。私の前でいちゃつくの、止めてくれな〜い？」

「そんなこというなって。これから、二人は会えなくなるんだから、俺たちの愛の力でばらばらになって……。さ！」

「あは〜ん。そうね〜シャックイ〜。」

長官が背後に回った。

「ふざけんな。俺はこんな奴、何でもねえぞ。風の細切れ！」

シャックイの暑い肉片があたり一面に舞い、血がシャックイの彼女、レビーの顔にかからなかった。

「アハハア〜。シャックイの幻術にかかったわねえ〜。」

レビーが腕を振って大笑いしている。

「今度は、私の番。華の手裏剣。」

私に向かって、手裏剣が投げられる。

その数、無料大数。

「あはははは。死ねえ。シャックイ、コンボよ。」

長官が、倒れた。

宙を待った。

地面に叩きつけられた。

そして、煉瓦の地面がひび割れ、長官の体が凹んだ。

「ハンサムな俺に勝てるやつはなし！俺がハンサム！ハンサムが俺！」

自分を指差し、ハンサムハンサムつぶやいている。

「長官！」

駆け寄った。

「あはは。そんな事させてあげない。その代わり、死んだら並べてあげる。」

手裏剣が大きい鶴になって、そして突っついてきた！

「いったた・・・イタイイタイ！」

長官がピクリとも動かない。

「長官！」

小指が動いた。生きている！

「この・・・変体ベとベとやろうが、よくも・・・。」

長官が怒った。

「その柱で見てんじゃねえ！」

クライシスで斬った。

「あ・・・ああ。」

シャックイ、自称ハンサムは、地面で倒れて、虫の息になっていた。

「ああ！シャックイー！待って、私も、そっちに……。」

あんたはぜったいしなせないわよ
「怪力腹部鳩尾一発！」

「シャックイー……私の、シャックイー……。」

こちらもまた、虫の息だ。

すると、二人の体が、風で飛ばされた。
骨になった。

「え？」

「思い出した。シャックイーとレビーは、千二百年前のイギリスロンドンで起きたなぞの不可解事件透明人間殺人事件の、犯人だ。幻術で惑わし、殺し。アイツは、こんな者まで蘇らせたのか……。」

理緒、帰れ。お前の手には、負えなくなる……。」

長官を平手打ちで倒した。

「私も行くの、決まり、文句はなし、以上！第一この世界に入れたのは長官なの。だから、絶対に帰れない。」

長官はうなずいた。

「後、二回で、頂上だ。とつとつ、お前の影とも、決着をつけろ。」

「私の影？」

それって何ナノ？

「お前をこの世界に入れたのは、いずれおこるお前の影との戦いでかつ確率を高めるためだ。」

そういつて、長官は、理由を話してくれた。

私を入れた理由を……。

最後の砦 二（後書き）

次回、アルインスパイ入りのわけ？

私の理由（前書き）

理由・・・それが起こる原因となった出来事の事。

私の理由

私の理由

お前をスパイに入れた理由はな．．．．．。

長官はぶらんなを作った渡辺を．．．．．。

「渡辺！」

長官は、渡辺を追い詰めた。

「私は、大いなる頭脳で選ばれた集団、頭脳軍^{ブランナ}を作った。お前は、何を作るのであろうか。それともこの私を、消すか？この場で。」
そういうと渡辺は、背中に担いでいた少女を目の前に突き出した。

「さあ、どうなんだ？」

長官は、唇をかんだ。

「逃がしてくれるのかなあ．．．．．。」

渡辺は、長官のところに来て、耳打ちした。

本当の新事実を。

「この．．．外道．．．．．。」

「どの口がそういうのかな？そんな事言うところの少女の首をすううううつときつちやおつかかなあ？」

「糞野郎。外道。卑劣。」

「ああ．．．．．あああ。あつあ．．．．．その言葉、そうだその言葉。それをお前に言ってもらえるとは．．．．．。とってもうれしい．．．．．。もつとお．．．．．もつつつと言ってくれえええ。」

渡辺は少女を長官のほうに投げ捨てると、煙となって消えた。

「理緒。」

長官はその少女を家へと送った。

こっそりと……。
還れないから。

「本当なの……。そのときに、私は影を作られたのね。」
「そうだ。そしてそのままではいけないと思って、お前に隠密^{スパ}行動人間に引き入れた。」

「そして、そのときできた人間が、理緒。お前の影。」
長官は私の肩をつかんでいった。

「それが、お前がここで倒す最後に人間。」
「で……。でも。」

私が口を開くと長官は肩を激しく揺らした。
「それが、お前の倒す最後の人間だ！」

それは私が見た長官で、一番怖い長官だった。

「何がどうあれ、それでお前は、スパイをやめるんだ……。」

長官が、私に引退しろと、そう告げた。

私の理由（後書き）

次回予告・・・次回の話のことを教える事のこと

渡辺の思考（前書き）

思考・・・考えている事

第一版アルイン暴女辞書

渡辺の思考

渡辺の思考

「ふふ……。悠里。お前はあのことを助けるのかな……。それとも、自分を捨てるきかな？」

渡辺は最上階の部屋の管理室のモニターで長官が告げたあの一言を聞いていた。

「そうだよな。悠里。お前があのことをこれ以上危険な目にあわせられるわけないよな。」

「悠里。お前の苗字は、同じなんだよな。くふふふふふうふふうふ。そういえば、お前はもう一度俺に、あの言葉を言ってくれるのかなあ……。」

「ふざけすぎだ。いい加減にしろ。」

「おお。リオ。待っていたよ。もうすぐここにアレが来るからね。そうしたら、二人で庭にまこう……。」

「ふん。そんな少女趣味はないな。あまりふざけが過ぎると、お前を庭にまくぞ。」

「そんなことは出来ないだろう。潰心臓！」
スクラップ・ハート

「あ……。ふうあ……。渡辺ええ……。」

「あまり、ふざけるなよ。これは僕からの贈り物だ。」

「ふふふふふふふふ。悠里。僕も、君を早く殺したいよ。」
渡辺は、モニターの中で、自分の計画道理に走る友達の姿を見ていた。

「悠里。悠里悠里悠里悠里悠里悠里悠里悠里。」

「僕が、一番殺したい相手……。」

「悠里　い　い　い　い　い　い　い　い　い　い
い　い　い　い　い　い　い　い　い　い　い

長官と理緒は、最上階の扉の前に来ていた。

「理緒、ひきかえすなら今のうちだぞ。」

私は、長官に極上の笑みを上げた。

「私は、負けないわよ。」

「そうだ。もし、俺が死んだりしたら、ここへ行け。」
そこには、ある一人の男の住所が書かれていた。
「死なせるわけないでしょ。この私がいるのよ。」

「入りたまえ。長官、理緒君。」

渡辺は、この部屋の中にいる。

渡辺の思考（後書き）

渡辺・・・アルティメットインビンシブル暴力女の登場人物。頭脳^{ブラ}軍の頭領。恐ろしい頭脳を持つ。

最後之敵 一（前書き）

最後・・・一番後の者。もしくは奴。

最後之敵 一

最後之敵 一 The・Final・Boss 一

「おお。入ってきてくれたんだね。長官君。」
クライシスを大きく構えた。

「お前だけは許さない。」

「はっはははっは！妹を俺が触ったからか？」

渡辺は腰に手をあてたからかに笑う。

「俺は、お前を絶対に許さないぞ……。風塵の舞！」
クライシスを思いっきり振った。

「ふふふ。強引だなあ。悠里は。」

「五月蠅い！五月蠅い五月蠅い五月蠅い五月蠅い！」

何度も何度もクライシスで生身の人間を切る。

「ふふふ。痛いようう……。」

渡辺の切られた血が長官を染める。

「はあ……。はあ……。お前なんか、死んでしまえ！」

「クライシスも、真っ赤に染まって泣いている。かわいそうなクライシス。」

渡辺は笑うと、右足で長官を蹴り倒した。

「ふうう！」

「クライシス、奪還。おお。わが剣よ。私に答えて、あのおろかなくずを血祭りに。さあ、風塵龍。出ておいで。」

長官がいつも出しているあの龍は出てこない。

「どうした、風塵龍。還ってきたんだよ。おいで。」
出てきた。

「私の主人は、悠里だ！お前ではない！」
すさまじい風で跳ね返り、長官の下へと、クライシスは戻る。

「クライシス。」

渡辺は血の涙を流した。

「許さない。私のクライシスをお前は来るわせた。お前の妹も、狂わせてやろう。こい。理緒。」

私は驚く。

「何で私なのよ！」

渡辺は瞬間移動で私の前に来た。

「止めろ！止めろ、渡辺！」

渡辺は、私に事実を告げた。

最後之敵 一（後書き）

敵・・・倒すべき相手の事。

次回、怒涛の一撃？

渡辺が告げる新事実とは！

って言うか、わかりますよね。

なんかこの手のことは難しくて。

わかりやすすぎですよね・・・。

すいません。

とりあえず、後五話以内で終わらせます。頑張ります。

最後之敵 二（前書き）

もうすぐ終わらせるよー頑張るよー。

最後之敵 二

「教えてやろう。」

「止めろ！渡辺、野郎、止めろおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

そして、長官にも聞こえるように、大きな声で言った。

「あそこでこの私を散々グロテスクに斬ったあの男こそ……。黒崎悠里は、お前の兄妹だ。お前の優しきお兄様なんだよ！吃驚だろう？」

渡辺が告げた新事實は、新事實過ぎる新事實だった。

アルティメットインビンシブル暴力女

最後之敵 二

「止め……。ろ。」

長官は、私の兄は、うなだれた。

「私の……。兄妹？そんなわけない。だって、家の何処にもそんな……。」

瞬間移動した渡辺は長官の前に来た。

「おい。お前の口から、説明してやれ。優しい優しいお兄さん……。」

そして、あごを蹴り上げた。

「さあ、お前の口から！」

首を締め上げ、床に叩きつけた。

「俺は、いない事になってる……。全部、俺の師匠がやったことだ。記憶も……。消されてる。」

「ほかにないのか、このやろう。」

そして、背中を蹴り上げ、腹部を拳で殴り落とした。

「まだ、あるだろう。」

「俺は、お前が、妹とだと知っていた。」

渡辺はそこで長官を黙らせた。

「そこらへんでいいな。おい、そろそろお前の光を殺していいぞ。」

混乱している私の後ろに人間が降り立った。

「では、殺そう。怪力柱へと叩きつける。」

私の頭を後ろの人間はもち、柱に叩きつけた。

技の名前とまったく同じ行動をする。

「もう、私が誰かわからないのね。」

それは、私だった。

「ふふふ。早く俺を殺して、妹さんを助けなきゃいけないぞー。ほら・・・よ!」

顔面を蹴る。

「私が、あんたを殺してやる!」

汀を片手に渡辺へと飛び掛る。もう一人の私は、ひとまず置いておく。

「ふふふ。リオ。やれ。」

「口を挟むな。渡辺。顔面踵落とし」

ガコンと衝撃が来た。

「うう・・・」

私と長官は同時にたった。

「理緒。お前は、それ殺したらとっと逃げろよ。最初の約束だ。」
そしてクライシスを構えた。

「そんなの、無理ね・・・」

私も汀を握りなおした。

「怪力汀一直線!」

太刀筋を横に構え、突進する。リオはするりとよけ。

「風の奏炎嵐！」

クライシスを利き手でまわして切りかかった。渡辺はよけた。

「そんなの、効く訳ない。疲労は恐ろしい。」

「はは、悠里、楽しいよ、あのときみたいに言ってくれるかな？」

「死んだらいっぱい言っでやるよ！」

私と長官……私と悠里は、もう一度、構えなおした。

最終決戦は、早めにおわらす。

「さあ、理緒。帰ってなんかいいもん食おうぜ！」

右半分が血で染まった長官も、結構怖いけど、真実を知った今は、怖くもなんともない。むしろ、早く帰って、思いっきり揺すって話させてやる。必ず！

最後之敵 二（後書き）

これからあの桐原につながります。そのために後三和ぐらいで終わらせて・・・。頑張るぞ。

最後の砦 三（前書き）

次回、渡辺戦クライマックス予定！

最後の砦 三

最後之砦 三

「怪力渡辺投げ・・・。」

私の影が、悠里に渡辺に投げた。

「ちょ、これひどくない？リオくん。」

渡辺は悠里が構えたクライシスを眼にした。

「怖いなあー。悠里君。妹さんにきらわれちゃうよ？」

「あ、私ぜんっぜん大丈夫だから安心してやられてね！」

そして私は、影に向かっていった。

「怪力白羽鳥！」

汀を親指と人差し指で挟み、横に手を振った。

「怪力折れろ。」

学校で、校長が話すマイクがたまに金属音を出すような事がある。
今回の音は、それと同じ音だった。

キィィ・・・・・・・・ン・・・・・・・・

汀が、柄を残して、影の足元に転がった。
最大のピンチだ。

「怪力メリケンサック。」

ポケットから出したメリケンサックを装着した影は、

「ちょ、タイム・・・タイムッ・・・・・・・・。」

柱が折れる音がした。

私が飛ばされたんだと思った。

けど、元の場所にいた。

死んでなかった。

「大丈夫か、理緒。」

悠里が隣にいた。

「渡辺は？」

悠里がクライシスで柱をさした。

「アレ。」

どうやら、渡辺が柱に飛ばされたらしい。

「うう・・・痛いよお・・・リオ君。痛いよお。」

悠里が渡辺の首にクライシスで傷つけた。

「小ざかしい蠅は、五月蠅くなくしろ！」

振り下ろした。

渡辺は、子指で防いだ。

「ふふふ・・・。」

「怪力、余所見禁止。」

理緒めがけて影がメリケンサックで殴りかかってきた。

「怪力怪力、五月蠅い！汀柄顔面付き！」

柄で顔を殴り飛ばした。

「ひでぶ！」

派手に綺麗に華麗に。美しく舞い、影は柱を折った。

ちよっと待って。

こんなに柱折ってしまったら・・・。

「悠里！早くしないと柱が！後数本しかない！早く逃げなきゃ！」

「そんな事、させない。怪力、柱総折！」

影が高速移動で、柱をすべて折っていった。天井がひび割れ、ぼとぼと落ちてきて、悠里の前にと私も前に、境界線を作った。

悠里は一瞬こっちを見て、にっこり笑って、クライシスの鞘を投げた。

何を言いたいの？

瓦礫で、何も見えなくなった。

「最初から、私は悠里と渡辺の命なんてどうでもいいんだ。いつの間にか私の影が立っていた。」

「はなから、俺の望みは光の消滅。お前の死だ。」

汀のかげらで、私めがけて振りかざした。

ここから、なんだか記憶がない・・・。

「ふざけるな！」

理緒が空中へ飛んで、リオの頭にドロップキックを食らわせた。

「河豚！」

「ラリアット！」

理緒はリオを捕まえると、

「ジャーマンスープレックス！」

理緒は結構プロレス向きだ。

「いた・・・。いたい。」

骨がミシミシいっていた。

「折れろ！」

そのまま、腕の骨が折れる音がした。

リオは倒れた。

そして瓦礫がくずれた。

「私のともに何をしてくれた。」

渡辺が瓦礫の中から出てきた。

「理緒、お前の兄弟は死んだかもな・・・。」

渡辺が、悠里の右腕を持ち上げて、投げつけた。

悠里の体が飛んでくる。
血だらけの。

「悠里！」

荒い粹だけど、息はしていた。これなら大丈夫。

「渡辺、あんたは死になさい！」

クライシスを・・・血で手が滑るクライシスを握ると、渡辺に歩いていった。

「ああ・・・その言葉。お前ら兄妹だ。俺をこんなに気持ち良くしてくれるう・・・。モット、もおおつと言葉を吐いてくれ。さあ、俺を罵ってくれえ・・・。さあ、モット俺を。」

クライシスで問答無用で切りかかった。

右肩から腰にかけて、斬りつけた。

渡辺は二つになった。

事情を知らない私は、鈍い私はこれで終わりだと思った。

「まだわからないかなあ・・・。僕は不死身なんだよ。絶対に死なないのお・・・。」

一人の体力はあてにならなくて、一人の体力は、付きかけているのに、無敵の男は、永遠存在可能だった。

最後の砦 三（後書き）

なのである。

最後之敵 三（前書き）

ああ、理緒がアブなーーーーーい！

最後之敵 三

最後之敵 三

「リオ、お前、光を殺さなくてもいいのか？ たかが腕一本じゃないか。さあ、蘇れ。」

渡辺がリオの気力を蘇らせた。

「ふふふふ・・・感謝するぞ、渡辺。この私が光に消える運命ではないのにな・・・。」

リオは、自分で腕をもいだ。

下に湖が出来る。赤い色の・・・。

「おい、渡辺。お前は死なないのだろう。右腕を、よこせ。」
そして高速移動で腕をもぎにいった。

「ふふふ、仕方ない。その代わり、殺せ。」
自分でもいだ。

リオは蘇った。

「くう・・・。」

渡辺は痛みに耐えているようだ。

「ふざけろ！ このマゾやろう！」

クライシスで切りかかると、リオはそれを右腕で防いだ。

その腕は、渡辺の血の通っている手であった。

「ふん、終わっても返さぬぞ。」

私の陰は高らかに笑った。

「怪力一万突き！」

何とかの拳のようにアタタタタタツとか言いながら、突きをしてきた。

「怪力クライシス一文字！」

それをよけて、腕を切り落とした。

「今度は、左腕か……。」

影は、どこか悲しそうに見える。

「まあ……いいかな！」

そういうと左腕を振った。

「な……なんではえてくるの？」

渡辺の腕だった。

「ふふふ。お前も不死身の力を手にしたのだな。では、リオ、お前の役目は終わりだ。もう一度私の中に戻って貰おう。スクラップ・ハート心臓潰し！」

私の陰の体がビクン！となって、崩れ落ちた。そしてそれを渡辺は、吸収した。

「これで殺せるのは、悠里の妹さんだけだな。」

渡辺は、最終決戦へと向かって、襲い掛かってきた。

「理緒！」

悠里が叫んだ。

渡辺の手は、私の首をつかんで宙にあげた。

最後之敵 三（後書き）

じ・えんど

クライシス・・・悠里の剣。両手でなければ使えない。

最後の一蹴りと一殴り（前書き）

アルティメットインビンシブル暴力女。

最後の一蹴りと一殴り

「コンの、離せ変体マゾおじさんん！」

思いつきり脚をばたばたさせたらちようどクリティカルヒットした。しかも私、その一撃、あたると思わなくて、思いつきり速度つけたの。

おじさん、悶絶。私、離された訳。

「こ．．．このお嬢さんは．．．．．とんだじゃじゃ嬢でしゅね．．．．．」

抑えてつぶやいてる。

不死身でもそれは痛いのかあー。

やっぱ渡辺も男だったのかあー。

理緒は少しばかり納得です。

「いくら不死身つつたて、男なんだよおおおお」

ゆらり、ゆらりと渡辺は近づいてくる。

「イヤアアアア、くるなあああ」

思いつきり拳を凄い速度で、それも、さっきの蹴りの比でなくらいに素早く出した。

綺麗にはまりに来てくれた。

「ふっがあああ．．．．．いい．．．．．ああ．．．．．とってもいい．．．．．いいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい．．．．．ああ．．．．．」

渡辺の姿が消えた。

「おじょうっさああああん。もっと私に気持ち良い痛みをくれないかい、あんな、おじさんが倒れるほど痛いのがなくなくて．．．．．」

さっきのパンチみたいに気持ち良いのを……。」

渡辺は跳躍して私の上に立つ。

「もっと、気持ち良いの……。……。たとえば、こんな。
開脚蹴り」

頭の上からけられるのには防御が間に合わなかった。
残っていた柱に叩きつけられる。

渡辺は更に迫る。

「こんなのとか。前転高速廻り」

今度は前に何百回転もして私を下に下にけり続ける。

「そうだ、こんなのもいいよ。脳天チョップ」

浮いた頭に思いつきりチョップが下ろされる。

「う……。うう。」

あごを持って渡辺の顔を直視せざるを得なくなった。

「ああ。こんなのも残ってたよ。君の得意技。」

私の身体をちょこんと地面に立たせると、渡辺はゆっくり後ろに走り去った。

そして速度をつけて……。

「貴方のお気に入り。ドロップキック。よ」

私は立っていられず体が傾いた。

渡辺は途中で速度を帰られなかった。

柱という柱を全部折りまくっていく。

私の兄だった人は、懷に手を入れて箱を出した。

「これ、に、し、まえ。」

悠里が出した箱は、おもちゃの缶詰と呼ぶにふさわしいものだった。

「貴殿の命は永遠なれど、この箱の中では意識のみが不滅なれ。最

高自信作。

一気に言い終えると、倒れた。

頭に思いっきり瓦礫の小さいのが激突したからだと思う。

「おっじようさああああああん！こんなカイカン、あじあわいたい。わあああああ」

ラリアットがすぐそこまで迫っていた。

とっさにその箱を目の前に突き出した。

「貴殿の命は永遠なれど、この箱の中では意識のみが不滅なれええええええええええ！」

とっさに叫んだ。

目の前には箱から出た黒い円が、渡辺の腕を、顔を、全てを吸っていく。

「こんな箱、出てやるわよ！そして、あんたらに、復讐……するんだか」

渡辺はいなくなつた。

疲労感が出て、後ろに向かって倒れた。

空は、これまでに見たことのないような色をしていた。

これで終わったと、思った。

年齢に会った私に戻れるんだと、思った。

一緒に暮らせるもんだと思ったのよ。私は。

どれもまやかしだとは気が付かずに。

はじまったんだと、おもってた。

最後の一蹴りと一殴り（後書き）

アルティメットインビンシブル女、次回、完結予定！

FINAL MISSION (前書き)

祝、
完結

FINAL MISSION

FINAL MISSION ～アレが私でそれが私で！～

渡辺を・・・一時閉じ込めてから一カ月後。

私はめでたく中学校に入学する事が出来ました。

とはいってもアイツ、ぶん殴ってた時にはもう中学生だって言っても良いんだけどねー。

とにかく、入学式には誰を無理やり呼んだと思う？

我らが長官、そして私の・・・。

まだまだ是から、私は任務が着てくれると思ってたんだけどアレからまだ一度も任務を長官からもらってない。

小学校で私リストラを体験したんです。

お前は隠密行動に向いてないんだって無理やりスパイを止めさせられちゃったんです・・・。

まあ、確かにアンだけ派手にどっかんばっこんやったら隠密活動は無理だと思うよ。

でもさ、せっかくの最終決戦なんだから派手にどっかんてやりたいと思うのも一理あると思わない？

絶対に私はいつかスパイ志願してやる。

それと、まだ暴れたりないっていう私の顔を見て長官がある組織を進めてくれた。

なんだか、スパイもどきとして働いても良いって言われたんだけど、なんか名前が変なんだよね。

切り裂きジャックに変身するんだって。

いまだきジャック・ザ・リパーだよ、なんか嫌だ。

流行に乗れてないって感じ。

でも暴れられるんならそれもヨシとして、

私は今、切り裂きジャックになるために、長官じゃないある人、栗柄八迫って人の元で切り裂きジャックのノウハウって奴を、中学校生活終了後、即効で学んでいます。

長官に、いつか私が立派な切り裂きジャックになるところを見てほしいな。

それからあの箱、アレはコンクリートに包んでござっていうんだっけか。

それにくるんでよく言うように東京湾に沈めてやった！

これで、当分は出てこれないっていうけれど、まさか出てくる事はないでしょ。

また出てきたりしても・・・。

その頃にはもっという箱が出来てるだろうし、私ももっと破壊的になってるはず。

なんとって私は、究極無敵暴力女。アルティメーションシブル

どんな事があっても長官と私で万事解決よ！

それはまた、別の話になるんだろうけど。

ここで語れるのはこれぐらいかな。

これからの話は、長すぎてちよっと・・・。

そうだ、それからの私の活躍は、どっか別の場所に、書かれてるんじゃないかな？

私は、長官と日夜、ショッピングに励んでいます。

だっていきなりのリストラだし、それ以上の事してもらわないと、この怨み、晴らされないから。いっその事手、使うかな？こう、襟持ってぐりぐりいゝって。

アルティメットインビンシブル暴力女

完結

まだだ、私はまだ終わってはいない。理緒、そしてお兄様の悠里。
私は絶対にお前たちを逃さないし、許すつもりはない。
この箱に開いたわずかな隙間から、少しずつ、少しずつ、お前たち
の周りを蝕んでやる。
そしてお前たちにも、気持ちいい快感を植えつけてやる。
傷みの快感を……。

この箱に開いていたこの隙間から少しづつな．．．．．。
忘れるなよ．．．。

悠里、理緒。

まだ私の気持ちイイは始まったばかりなんだからね・・・。

箱の中で、彼はごとりと動き始めた。
隙間から快感をぶちまけていく。
その快感が彼となって外に出るのは、別の話。

アルティメットインビシブル暴力女
究極無敵暴力女

完結

FINAL MISSION (後書き)

また、別の伝説でお会いしましょう！

究極無敵暴力女より

また、どこかの番外編で合えますように！

究極無敵暴力女の兄より

また何時か、お前たちを殺して気持ちいい感覚を貰ってやる

上記者怨む者より

思えばこれが始めても物語の完結です！

時間に任せて短期的に・・・三十分ぐらいかなで書き上げたので荒いですが、また時間を見つけて書き直すつもりです。よろしくお願いたします。

最後までのご愛読、大感謝です・

これからも、アルティメットインビンシブル暴力女を、よろしくお願いたしますね。

とかいってー。これで終わりですけどなー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2490e/>

アルティメットインビンシブル暴力女

2010年10月12日16時29分発行